

第99回 日本泌尿器学会総会

メンズヘルスセミナー 2011

4/23 sat

17:40~19:10

名古屋国際会議場

2号館1階

第13会議場212

PROGRAM

開会の挨拶 17:40~17:45

宮崎 良春 先生

日本臨床泌尿器科医会専務理事

演題1 17:45~18:25

イソフラボンと 前立腺がん予防

座長: 堀江 重郎 先生

帝京大学医学部泌尿器科教室教授

演者: 平尾 佳彦 先生

奈良県立医科大学泌尿器科学教授

演題2 18:25~19:05

更年期疾患に寄与する アンドロゲンの中枢作用

座長: 並木 幹夫 先生

金沢大学大学院医学系研究科教授

演者: 松本 高広 先生

徳島大学大学院

ヘルスバイオサイエンス研究部

動物資源研究部門主任准教授

閉会の挨拶 19:05~19:10

熊本 悦明 先生

日本Men's Health医学会理事長

主催: 第99回日本泌尿器科学会総会
日本Men's Health医学会

共催: 日本臨床泌尿器科医会

アンファー株式会社

大塚製薬株式会社

武田薬品工業株式会社

日本新薬株式会社

イソフラボンと 前立腺がん予防



平尾 佳彦 先生
奈良県立医科大学泌尿器科学 教授

本邦の前立腺癌罹患率は、二次予防施策の推進により急激に増加しているが、この背景には遺伝子学的な差異に加えてライフスタイルの変化も関与していると考えられる。前立腺癌の発育速度は他臓器癌と比較して緩徐であり、発生・進展には性ホルモンの影響が関与していることから、一次予防として前立腺癌の化学予防の可能性が期待されている。大規模第3、4相試験ではビタミンC、Eおよびセレンウム、 β caroteneについては、前立腺癌発生予防の明確な答えはでておらず、疫学的な研究からイソフラボンが関与する可能性が示唆されている。文科省特定領域研究赤座班によると、日韓両国ではイソフラボン血中濃度は欧米に比較して有意に高く、さらに抗アンドロゲン様活性を有するEquol産生者の頻度が高いことが明らかになった。Equolは腸内細菌によりダイゼインから変換され、Equol産生能は日韓両国とも若年者で産生者の頻度が減少する結果が得られている。健常者にイソフラボンを投与すると、DaidzeinとEquolの血中濃度が上昇し、DHTが減少する傾向が見られている。今後、1次予防としてイソフラボンの影響について更なる検討が必要である。

■ 学歴

昭和47年 3月 奈良県立医科大学卒業

■ 職歴

昭和47年 5月 奈良県立医科大学付属病院臨床研修医(泌尿器科学)

昭和48年 1月 奈良県立医科大学助手(泌尿器科学)

昭和52年10月 米国Northwestern大学医学部research fellow
(病理学)

昭和58年11月 奈良県立医科大学助教授(泌尿器科学)

平成8年12月 奈良県立医科大学教授(泌尿器科学)

■ 所属学会

日本泌尿器科学会(評議員)、日本腎臓学会(法人評議員)、日本癌治療学会(評議員)、日本Endourology・ESWL学会(監事)、国際泌尿器科学会(理事)他

■ 主たる研究領域

泌尿器科腫瘍学、医療標準化、医工学(テレメトリ排尿機能診断)

更年期疾患に寄与する アンドロゲンの中枢作用



松本 高広 先生
徳島大学大学院
ヘルスバイオサイエンス研究部
動物資源研究部門主任准教授

性ステロイドホルモンの作用はリガンド依存性転写因子であるアンドロゲン受容体(AR)及びエストロゲン受容体($ER\alpha$, β)を介した標的遺伝子群の発現制御により発揮される。アンドロゲンは、標的細胞内において直接ARを介して作用する一方、芳香化酵素によりエストロゲンにも転化された後、 $ER\alpha$, β を介しても作用する。このように、性ホルモンの多彩な生理作用は、複数のステロイド受容体群を介した複雑多岐にわたる情報伝達機構により発揮されると予想される。そこで、本研究では生体内における性ホルモン作用の真の生理学的意義を明確にするため、性ホルモン作用を完全に遮断した性ステロイド受容体群トリプル欠損マウスを作出し、性ステロイド受容体を必須とする生理機能の解明を試みた。雄性のAR、 $ER\alpha$ 、 $ER\beta$ トリプル欠損マウスは正常に出生したものの、成長に伴い顕著な肥満を呈することが明らかになった。また、各種の高次神経機能解析を行った結果、雄性トリプル欠損マウスは著しい気分様障害を示し、各種行動テストにおいて不安行動の増加が観察された。この雄性トリプル欠損マウスにおける不安様障害は前脳のシナプス後セロトニン1A受容体の発現低下に起因することが明らかとなった。このように、性ステロイド受容体群は協調的なセロトニン1A受容体の発現制御を介して、抗不安作用を発揮していることが明らかになった。

■ 略歴

平成 7年3月 早稲田大学人間科学部人間基礎研究科 卒業

平成10年3月 早稲田大学大学院人間科学研究科

修士課程生命科学専攻修了

平成10年4月 日本学術振興会特別研究員(DC1)

平成13年3月 早稲田大学 大学院人間科学研究科

博士課程生命科学専攻 修了博士(人間科学)

平成13年4月 科学技術振興事業団戦略的基礎研究推進事業 研究員

東京大学分子細胞生物学研究所(加藤茂明教授)

平成14年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)

東京大学分子細胞生物学研究所(加藤茂明教授)

平成17年4月 科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業

グループリーダー

東京大学分子細胞生物学研究所(加藤茂明教授)

平成22年4月 東京大学分子細胞生物学研究所

先導的研究教育プロジェクト 講師

平成22年7月 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

動物資源研究部門主任准教授